

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第178号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成26年12月21日

アカアシチョウゲンボウ



2014. 6. 22 天塩郡豊富町稚咲内

撮影者 石田 卓也 (札幌市西区)



も く じ

天売島だけで繁殖する幻の海鳥—ウミスズメ—
 北海道海鳥センター 長谷部 真 2

ほびすけの鳥撮り日記 —亜種シベリアツメナガセキレイの観察など—
 札幌市立北辰中学校 2年 池上 滴 8

シルバ通信④ ワシタカ類保全至上主義の是非
 —ワシタカ類の保全は他の生物の保全に役立つか?—
 北海道大学農学院 森林生態系管理学講座 先崎 理之 10

音更の森に生きるエゾリスとカワアイサたちの物語
 JPS (日本写真家協会) 会員 自然写真家 矢部 志朗 12

石狩市にマナヅル 当別町 道川富美子 14

表紙の鳥 (アカアシチョウゲンボウ) 札幌市 石田 卓也 14

探鳥会 ほうこく 15

探鳥会 あんない 18

鳥 民 だ よ り 18

天売島だけで繁殖する幻の海鳥 —ウミスズメ—

北海道海鳥センター 長谷部 真

天売島の海鳥調査の現状

天売島と言えば、数十万羽のウトウの世界最大の繁殖地として知られています。しかし、ウトウ以外の海鳥の数は多くなく、その中に絶滅危惧種のウミガラス、ウミスズメ、ケイマフリ、ヒメウが含まれています。天売島には天売海鳥研究室という北海道大学を中心とした学生と研究者の拠点があります。ここではウトウ、ウミネコ、ウミウを研究対象にしてきましたが、ウミネコとウミウの減少により、現在ではウトウのみが主な研究対象になっています。これ以外の海鳥に関しては、①数が少ない、②調査が困難（危険）という理由から研究対象になっていません。かつての天売島はウトウではなく、ウミガラスの島として有名でしたが、今ではその面影もなく、数十羽がかろうじて繁殖している状態です。近年環境省の保護増殖事業により毎年保護対策が行われ、繁殖数が調べられています。残りのケイマフリ、ウミスズメ、ヒメウはどうなっているのでしょうか？まず、冬鳥として道内各地の港に現れるヒメウは意外かもしれませんが、確認されている繁殖地は天売島と函館の恵山のみで、天売島の巣数も30巣程度です。天売海鳥研究室では毎年ヒメウの巣を数えてきましたが、近年ヒメウは崖の上から見えない場所で繁殖するようになったため、ウミガラスの調査の傍ら数えられているに過ぎません。ケイマフリもウミガラスの調査の傍ら個体数と巣数の調査が行われているだけです。ウミスズメは近年調査がされておらず、繁殖状況は不明の状態でした。ここでは最近になって行ったウミスズメの調査について報告します。



日中の海上で見かけるウミスズメ

ウミスズメとは

ウミスズメは日本海沿岸からアリューシャン列島、アラスカを経て、北アメリカ西海岸までの島などで繁殖するウミスズメ科ウミスズメ属の海鳥です。ウミスズメ属には国内にウミスズメとカムムリウミスズメの2種類がいます。ウミスズメは1956年に天売島で国内で初めての繁殖が確認されました。その後、根室のハボマイモシリや岩手県の三貫島で繁殖情報がありましたが、近年は天売島も含めて繁殖情報が全くなっています。天売島では1980年代にも繁殖が確認されましたが、1990年代になると過去の繁殖地でウミスズメの巣が見つからなくなったため、繁殖が危機的状況にあるとされていました。その後、調査記録はなく、僕が北海道海鳥センターに来た2009年にもまっ



ウミスズメ

たく情報はありませんでした。天売島の海鳥調査の先駆者で、1980年代にウミスズメの巣を発見した綿貫豊氏が「昔は夜にウトウの調査をしていると、鳴き声が聞こえたものだが最近ではめっきり聞こえなくなった」と話していました。なぜ、ウミスズメの調査は行われなくなったのでしょうか？その理由の一つとして夜行性の繁殖生態が挙げられます。ウミスズメは夕暮れ時に繁殖地に帰ってくるウトウと異なり、完全に暗くなってから繁殖地に帰ってきます。しかも、月明かりがない暗闇を好みます。ウミスズメの巣は崖にある岩の隙間にあり、ほとんどの巣に近づくことができず、わずかに近づける場所にある巣に行くことは危険を伴います。さらに、ウミスズメはウミスズメ科の中でも「早成性」という変わった子育てをします。簡単に言うと『陸上で子育てをしない』のです。ヒナは孵化すると2日以内の夜中に巣立ちます。巣立つといっても、もちろん海上で親鳥が世話をします。そして巣立ったばかりのヒナは既に潜ることができます。親子は朝までに捕食者がいる危険な島から何kmも沖合に離れます。ヒナを連れたカモの親子を想像すれば、わかりやすいと思います。これだけ条件が揃えば、調査が困難なもの無理はありません。「天売島にウミスズメが繁殖している」と言ってもピンと来ないのも仕方がないです。このため普通に天売島に行っても、ウミスズメに出会う機会はずりありません。せいぜい、日中にフェリー・小型船や集落から天売島沿岸の海上にいるのを観察できるかどうかです。小型船以外では近づくことが難しいため、一般の目にとまることはまずありません。しかも、ウミスズメを観察できるのは6月までです。ヒナが孵化するとすぐに巣立つので、他の海鳥の育雛期である7月には天売の海からすでにいなくなっています。

ウミスズメ調査を始める

僕は国内唯一の繁殖地である天売島のウミスズメの繁殖状況がまったくわかっていないことに危機感を覚え、それを明らかにしていこうと決意しました。ただ、どうやって調査をしたらいいかわかりませんでした。「とりあえず、鳴き声を聞いてみよう」。ウミスズメは夜に仲間と意思疎通をはかるためによく鳴きます。まずは繁殖期

である5月と6月の風のない夜に海鳥繁殖地の道路沿いから耳を澄ませてみることにしました。しかし、実はウミスズメの鳴き声を聞いたことがありませんでした。野鳥の声の図鑑で探しても、カムリウミスズメはあってもウミスズメの声はありませんでした。海鳥センターのデータを整理していたところ、偶然私の前任者の彦坂清子氏がロシアのタラン島に海鳥調査に訪れた時に撮影したウミスズメのヒナの巣立ちシーンの動画を発見しました。この動画では親鳥が海上からヒナを一生懸命呼んでいました (<https://www.youtube.com/watch?v=mUzU93D235Q>)。この声をたよりに鳴き声調査を行いました。はじめての誰もいない天売島の夜の海鳥繁殖地は一人で行くと怖いので、道路に止めてある車のそばから離れられませんでした。ウミスズメの声は道路からだとかすかに聞こえる程度で、集音マイクを使って録音できるような大きさではありませんでした。翌年の2010年は思い切って道路から少し離れて崖の方へ行ってみましたが、真下の崖からの鳴き声はかえって聞きづらくなりました。

夜のウミスズメ繁殖地

そして、2011年になり、この膠着状態をどうにか打破しなければならぬと思いました。これまで繁殖記録がある場所は昼間でも1時間近く海岸沿いのガレ場を歩いた後に、1箇所波のかぶる海を渡らなければならないところがありました。昼間でも足場が悪く歩くのに大変な場所です。「でも、ここにいかなければ、先に進めない」。意を決してヘッドライトを点けて、夜の足場の悪い海岸を歩いて行きました(天売島の海鳥繁殖地は天然記念物のため、道から外れた入域には現状変更の許可が必要です)。出発は夜の21:00から22:00くらい。本来なら調査が終わってこれからゆっくりしたい時間です。でも、風が弱く波が穏やかな夜でないとウミスズメの鳴き声が聞こえないので、調査ができる夜は限られています。海岸で巣立ちヒナを確認できれば、繁殖確認になります。暗闇の波のかぶる海岸を渡り、目的地に着いたのは23:00くらい。そこで1~2時間くらい海岸で崖から下りてくるウミスズメの巣立ちヒナをじっと待ちました。5月・6月でも夜は寒く、10℃を切るこ



ウミスズメの繁殖地

とも珍しくありません。はじめのうちは動いた後なので暖かいですが、じっとしているとだんだん寒くなってくるので、ときどき移動しました。この調査を2~3回行いましたが残念ながら巣立ちヒナは現れませんでした。でも、夜の繁殖地は昼間とはまったく違う姿を見せていました。ウミスズメの声が崖や海上からはっきりと聞こえ、海岸沿いの藪からもウトウが出入りをし、ウミネコの声も聞こえました。海と陸を行き来するウミスズメの羽音も聞こえました。ここよりさらに先の歩いて行ける限りの場所まで行ってみました。どこでもウミスズメの鳴き声は聞こえました。「これだけ鳴いていればたくさん繁殖しているに違いない。来年こそはウミスズメの巣立ちヒナを見つけるぞ!」

夜間海上調査

2010年に日本鳥学会で天売島のウミガラスについて発表した時に、ウミスズメの近縁のカムリウミスズメの調査を行っている『カムリウミスズメ個体数調査チーム』の人に会いました。彼女らの調査地は過去に『ダーウィンが来た』という番組で放送されていた宮崎県びろうじまの枇榔島で、番組では巣立ちヒナが海へ旅立ちの様子が撮影されていました。天売島のウミスズメの調査で行き詰まっていることを話すと、驚いたことに枇榔島で夜の海上で個体数を数えようとしていることがわかりました。「えっ、夜の陸だけでなく、海にもいるの?」。夜の海にウミスズメが集まっています、それを数えることができるなどこれまで考えもしませんでした。しかも、捕獲することもできるそうです。捕獲して成鳥の抱卵斑を見つけ繁殖個体であることを確認できれば、崖にある巣やヒナを見つけなくても繁殖していると判断できます。「でも、夜の海に船を出してくれる人がいるだろうか?また、その費用をどうすればよいのか」。枇榔島の場合はカムリウミスズメ個体数調査チームという任意団体が助成金を申請して、そのお金で調査を行っているそうです。幸いにして、海鳥センターにも『北海道海鳥センター友の会』という任意団体があり、これまで多くの実績があり、調べてみると過去にも助成金を獲得したこともありました。それなら、友の会から助成金を申請してみよう。残りは船です。天売島ではいつもウミガラスの調査で船を出してくれている船長がいるので、頼んでみました。「普通、夜に船を出すやつはいねーぞ」。船長は言いました。夜に船を出すためには、航海灯が必要です。ただ、その航海灯さえつければ、夜間航行の許可は簡単に下りるそうです。こうして、助成金には船の航海灯設置費も盛り込まれました。そして、2012年にセブンイレブン記念財団から助成金が出りました。助成金が出たからには、調査を実現しなければなりません。はたして、うまく行くでしょうか?

枇榔島でカムリウミスズメの調査

天売島で夜間海上調査を行う前の2012年の春に、「カムリウミスズメ個体数調査チーム」より枇榔島でカムリウミスズメの調査をやるから参加しませんか?との誘い

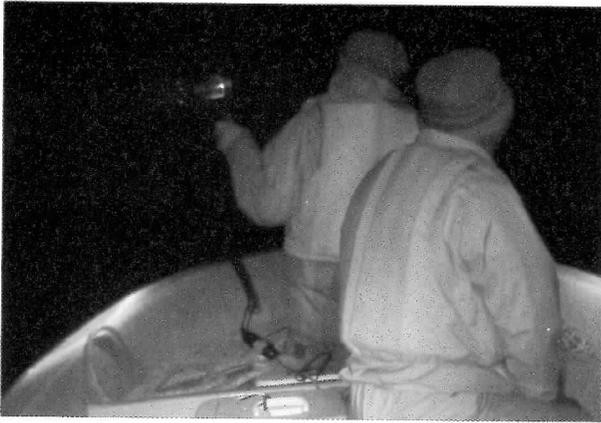


カムリウミスズメ (宮崎県枇榔島)

を受けました。枇榔島はカムリウミスズメの世界最大の繁殖地で、調査や巣の様子をぜひ知っておきたかったので、願ってもない話でした。枇榔島は天売島よりもずっと南にあるため、繁殖期が3~4月で天売島の時期と重なることはありません。やることは巣の調査と夜間海上個体数調査、陸上と海上における成鳥の捕獲でした。4泊5日の日程でしたが、波が悪く船を出せない日が続き、近くの門川町の宿に待機していました。4日目に波が少しおさまりようやく日中に枇榔島に渡れました。枇榔島の繁殖地は崖だけでなく、人が行ける場所にも巣がたくさんありました。ただ、実際に巣を見つけるのは難しくなかなか発見することができませんでした。計画では島でキャンプをし、夜に帰巢してきた個体を捕獲計測・足環装着する作業がありましたが、なかなか島に渡れなかったため、夜は海上の個体数調査のみとなりました。船は夜の20:30頃に門川の港を出ました。30分くらい夜の海を走り、枇榔島の沖に到着すると21:00から1時間ごとに枇榔島のまわりを1周し、ライトで海上を照らしながらカムリウミスズメを数えました。調査は20分くらいで終わるので、あとの40分は船で待機することになります。この夜は波があったので、静止した船の上で待つのは船酔いに強い僕でもつらく、弱い人は甲板に転がっていました。調査は結局2:00頃まで続きました。このとき、ライトを使ってカムリウミスズメを数えていたのが後に天売島に来ることになるアメリカ人のウミスズメ研究者であるデロー・ウィットワース氏(以下、本文では敬称を省略して「デロー」といいます)でした。

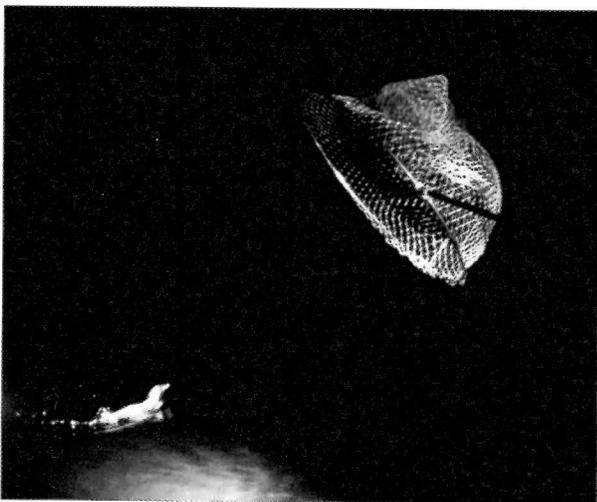
夜の海上調査 (2012年)

天売島のウミスズメはいつ頃たくさんいるのだろうか?ととりあえず抱卵期の4月下旬から調査を開始することになりました。しかし、4月の天売の海は荒れた日が多く、ウミスズメの調査に向く風の夜はほとんどありません。その中で1日だけ風の夜があったので、調査してみました。その夜は濃い霧がかかっていましたが、日中にGPSを使って航路を設定してあったので、迷うことはないと思っていました。しかし、船が港から出港してすぐにライトが霧に反射して遠くまで届かないことに気づきました。それでもとり



夜の海上でライトを使ってウミスズメを探す

あえず行けるところまで行ってみることにしました。船の位置はGPSで確認できるが、船長は船の向きを目視で確認していました。次第に集落の街灯が見えなくなってから船長は向きがわからなくなり、船がぐるぐる回り始めました。このGPSには方位計もついていましたが、船長は「反応が遅い」と言っていました。これでは調査どころではなく、船はどうか港にたどり着きました。5月のある夜には他の仕事で疲れていた船長に無理にお願いしたので、船が暴走し、一緒に乗っていた調査員が「もう船に乗らない」と怒って帰ってしまいました。「危険を冒してまで調査を続けるべきではない・・・」。もう調査をやめようか迷いました。でも助成金をもらっていたので「できる範囲のことをしよう」と考え直しました。幸い船長はその後、暴走することはなくなったので、調査を続けることができました。しかし、この調査には最低2人必要で、調査ができるかはその日の夜になってみないとわかりません。せいぜい目処がつくのが前日くらい。そうなるならあらかじめ「この日手伝ってください」と頼むのが無理で、前日にあちこちに電話をかけ「明日はどうですか?」と手伝ってくれる人を探すことになりました。はじめは天売海鳥研究室の学生に手伝ってもらおう予定でしたが、暴走の件もあったため、指導している先生からは「学生は乗せられない」と断られてい



夜の海上に浮かぶウミスズメと捕獲用網

ました。それで羽幌から手伝いにきてもらいましたが、どうしても人がいないときは、天売島に向かうフェリーの中で鳥の観察に来た人に声をかけたこともありましたが、手伝ってもらっているのでも、港への送迎、海鳥繁殖地の案内、調査方法を教えたりと調査の準備以外にも大変でした。でも、苦勞した甲斐があって、5月には数が少なかったものの6月になると夜の海上に多くのウミスズメが現れました。300mと600m沖の2つの航路の結果を足すと最大で200羽くらいでした。天売島のこれまで繁殖記録がある場所よりも、他の場所でたくさんのウミスズメがいて、海鳥繁殖地の全域で繁殖しているらしいことがわかりました。個体数調査時には船長は船をGPSの線に沿って船を動かすだけなのでつまらなそうにしていたのですが、捕獲の時は船長の操船術の見せ所で、楽しかったらしくいつもよりも夜遅くまで付き合ってくれました。

巣立ちヒナの確認

同時にもう一つやらなければならないことがありました。巣立ちヒナの確認、つまり繁殖確認です。夜の海にたくさんウミスズメがいるときは、きっとヒナも巣立っているに違いありません。夜の海上捕獲が終わった23:30くらいから「ここがんばらなければならない」と2011年にヒナを発見できなかった調査地に向かいました。これまでは1~2時間滞在して夜中に帰ってきていましたが、帰るとかえって無事に帰って来るか周りの人に心配をかけていました。「いっそのこと泊まってくれば心配かけることもない」。思い切って泊まることにしました。泊まるといってもやわらかな草があるわけではなく、下は大岩が転がるごろごろとした岩場です。その中から寝っ転がるのにちょうどよさそうな岩を見つけ、暖かい格好をするだけです。落石が怖いので安全そうな場所を選びましたが、落石の音がする度に飛び起きていました。岩陰で寝ていると海岸にいる親鳥の声が騒がしくなってきました。しばらくすると崖の上からこれまで聞いていた成鳥の声ではなく、もっと弱々しい声が聞こえました。「これはヒナに違いない」。すぐに飛び起きてあたりを探しました。その声は崖からだんだん下りて来ます。すると、岩陰に小さく動くものがありました。



ウミスズメの巣立ちヒナ

「やった巣立ちヒナだ!」。ついに見つけました。ヒナは手のひらに乗るほど小さく、ハシブトガラのような色合いをしていました。海では親鳥が待っていました。こうして2012年に天売島で久々にウミスズメの繁殖確認をすることができました。

再び枇榔島へ (2013年)

2013年も4月のはじめに再び枇榔島に行くことになりました。2012年に枇榔島でカムリウミスズメの夜の繁殖地の調査に参加できなかったので、夜に巣に戻って来る様子を見るためにこの年はぜひ参加したいと思っていました。波の状態は良くありませんでしたが、3日目にして枇榔島に渡ることができました。枇榔島では島の頂上にある灯台のたもとでテントを張り、日中に巣探しをしました。天売島で巣を見つける練習のために真剣に探しました。夜になるとテントの周りはカムリウミスズメの鳴き声でうるさいくらいでした。繁殖地に行って座って待っていると、突然木の梢からバサバサと音がして、梢からカムリウミスズメが落ちてきました。抱卵斑の確認、足環の装着や各計測をするために降ってきたカムリウミスズメが巣に入る前に捕獲するのが僕の役割でした。さすが世界最大の繁殖地だけあって次々と下りて来ました。ここにはネコのような鳴き声のオオミズナギドリも繁殖していました。

巣の発見と抱卵斑の確認 (2013年)

2012年は海上で個体数を数え、巣立ちヒナを確認することができました。でも、まだ巣を見つけていません。そんなとき枇榔島でカムリウミスズメの調査をしていたデローが調査の合間に天売島にも来てくれることになりました。デローが来たのは個体数調査をするにはまだ早い5月はじめでした。こうしてデローと巣を探すことになりました。なかなか見つからないので、巣がありそうな場所を見つけ、夜に帰巢するのを待っていました。この夜は5月の



巣を探すデロー・ウィットワース氏

はじめだということにとっても寒く1℃くらいしかありませんでした。30分も待っていると耐えきれないほど足が冷たくなってきました。するとバサバサとウミスズメらしい鳥が崖に着地する音がしました。「ここに巣があるに違いない」。次の日の日中に親鳥が着地したあたりで巣を探してみました。すると、岩の隙間に背中を向けて座っているウミスズメを発見しました。「ついに巣を見つけたぞ!」。天売島でウミスズメの巣が見つかったのも久しぶりです。ただデローにとって5月のはじめの天売島は九州とは違って寒かったらしく、「これはまるでアラスカじゃないか、今度は5月ではなく6月に来たい」と言って帰ってしまいました。その後、この巣の様子を何度か見に行きましたが、ある日親鳥がいなくなっていました。巣内には孵化した卵殻が残されていました。どうにか卵殻を採取するとその手前で卵をもう一つ発見しました。ウミスズメの卵は通常2つですが、ヒナが孵化すると親鳥は2度と巣に戻って来ることはないので、もう一つの卵は死卵と判断して採取しました。このほかにもあちこちで巣を探しましたが、巣を発見したのはこの場所だけでした。繁殖地は危険な場所ばかりなので、巣を探すよりも巣立ちヒナや海上で成鳥を捕獲するほうが、安全で効率が良いと思います。



巣の中で背中を向け抱卵中の親鳥

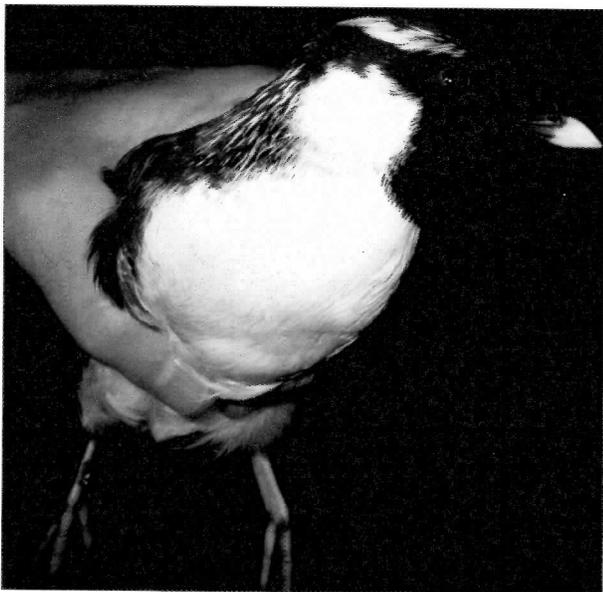
夜間海上調査 (2013年)

2012年はウミスズメの数が多い最盛期がわかったので、2013年はその時期に集中して調査を行うようにし、タモ網を頑丈なものに交換しました。この年は天売海鳥研究室の人や偶然天売島を訪れていた鳥類標識調査者の手伝いを得られたこともあって、海上で効率よく成鳥を捕獲し、抱卵斑を確認し、海上で親子を発見することができました。一方で、調査を最盛期に集中させたにもかかわらず、調査に適した日は少なく、調査時間が2時間程度と限られていたため、多くの個体がいる波や月の条件のよい夜に十分に時間をかけて調査や捕獲をすることができませんでした。

デローが捕獲調査に参加 (2014年)

2014年は十分な調査時間を得るために、これまで2時間程度行っていた夜間調査を5～6時間の一晚中に延長す

ることになりました。時間延長によって繰り返し広範囲にウミスズメの調査を行うことができ、個体数調査の精度が高まります。また、多くの個体の抱卵斑の有無を確認できることから、より精度の高いつがい数の推定につながります。これまでデローは他の調査のついでに天売島に来てもらっていましたが、この年はアメリカから直接来てもらいました。彼はウミスズメ捕獲の第一人者で、これまで多くの個体を捕獲してきた経験があります。これまで私たちは船首に二人ウミスズメを探すライト持ちがいて、真ん中に左右に一人ずつ網手がいる体制で捕まえていました。デローの場合は網を持ったデローが船首にいて、その後ろからライトを照らす人の二人の体制でした。ただ、この年は調査に適した波の良い夜が少なく、ウミスズメの嫌いな月が出ていたので、調査や捕獲が思うように進みませんでした。また、ほかの仕事で忙しい船長は船の運転を頼む人を見つけれず、十分に寝ることができなくなっていました。条件が悪く中でも、デローは捕獲のこつや捕獲した成鳥の扱い、巣立ちヒナの扱いに長けており、学ぶところがたくさんありました。また、抱卵斑を見つけるのも早く正確で、2013年は捕獲した3割程度の個体からしか抱卵斑を見つけられませんでした。デローは小さい抱卵斑も見逃さずに6割程度見つけていました。また、なによりもデローがいてくれたことによりこれまで一人で行っていた海岸の巣立ちヒナの調査などに二人で行くことができ、大変心強くなりました。危険でつらい夜中の調査に喜んで付き合ってくれる人はなかなかいません。また夜間海上調査や捕獲はデローと自分と船長がいればできるので、毎回手伝ってくれる人を探す手間もなくなりました。ただ調査が十分にできなかったのも、デローが帰ってから調査を続けました。その結果、これまで少ないと思っていた6月の後半にもウミスズメが月の条件によってはたくさんいることがわかりました。



捕獲したウミスズメと足環（右足）

今後のウミスズメ対策に向けて

ウミスズメは環境省のレッドデータブックで絶滅危惧種 I a 類に分類されているにもかかわらず、保護対策がなにもされていません。それどころか調査もされていなくて、個体数や繁殖数などの基本的な情報がわかっていませんでした。天売海鳥研究室でも前述のように調査の難しさと危険性から研究対象にしていませんでした。同じく天売島のみで繁殖するウミガラスには保護増殖事業が行われているのに、ウミスズメにはなにも行われぬ理由はどこにあるのでしょうか？その理由は、減少要因ややるべき対策がはっきりしているウミガラスとは異なり、ウミスズメは個体群の規模や減少要因や対策に関する基本的な情報がないからです。この状況を打開しなければならないと手探りで始めたのがこの調査でした。ここ数年の調査からウミスズメの繁殖個体群の規模がだんだん明らかになってきました。その数はウミガラスよりも多く、夜の鳴き声が聞こえる範囲からケイマフリよりも多い可能性があります。一方で、最近天売島でネコ対策が始まりましたが、ネコによってウトウやウミネコだけではなくウミスズメの繁殖に影響を与えている可能性が高いことがわかってきました。ウミスズメのヒナが巣立ちの際に崖から下りてくる海岸にネコが徘徊していたのです。餌もない夜中の海岸でネコはなにをしていたのでしょうか？そこに偶然ウミスズメのヒナが崖から下り、ネコに食べられてしまう光景は想像に難くありません。私たちは今後もウミスズメの繁殖状況の調査を続けながら、ウミスズメの個体群の情報を明らかにすることにより、ウミスズメが種の保存法の『国内希少野生動植物種』に指定され、法的に保護され、保全対策が行われるようになる環境を整えることを目指したいと思います。また、天売島の調査で得られた知見を他のウミスズメの潜在的な繁殖地の調査に生かしたいと思います。



夜にヒナが巣立つ海岸に現れたネコ

ほびすけの鳥撮り日記

—亜種シベリアツメナガセキレイの観察など—

札幌市立北辰中学校 2年 池上 滴

僕は自然豊かな街で育って、海や川や山などで自由に遊んでいました。常に自然に触れ合っていました。小学校5年になるときに札幌へ引越しました。都心部に住み、自然が少なく正直つまらなかったです。それに気づいてくれた母が、日本野鳥の会の初心者探鳥会に誘ってくれ、参加したのが初めての野鳥観察でした。とても楽しくて、それからはまってしまいました。観察していると、鳥たちは様々な仕草を見せてくれます。伸びや頭かき、時には大きくび、本当に可愛くて、野鳥観察の楽しみになっています。

また、様々な方の上手な写真を見て、自分も写真が撮りたくなり5年の冬からコンパクトデジカメで撮り始めました。さらに、6年生の10月から「ほびすけの鳥撮り日記」(<http://hopisukebird.blog.fc2.com/>)というブログを開始しました(ブログ上では、氏名や年齢を公開しておりませんのでよろしく願います)。なぜブログをやりたいかということ、野鳥観察をしていく上で、他の方との交流を楽しみたいと思ったからです。ブログを始めると、写真の質を向上させたいと思うようになりましたが、コンパクトデジカメではどうしても飛翔写真などがうまく撮れません。中学校に入るときに、お年玉などの貯金を使って念願の、一眼レフカメラと300mmの望遠レンズを手に入れました。使い慣れるのには時間がかかって、今も苦戦していますが、構図や撮り方に工夫をして写真を楽しんでいます。また、春の渡りの時期は早朝、学校へ行く前にマイフィールドに通っています。

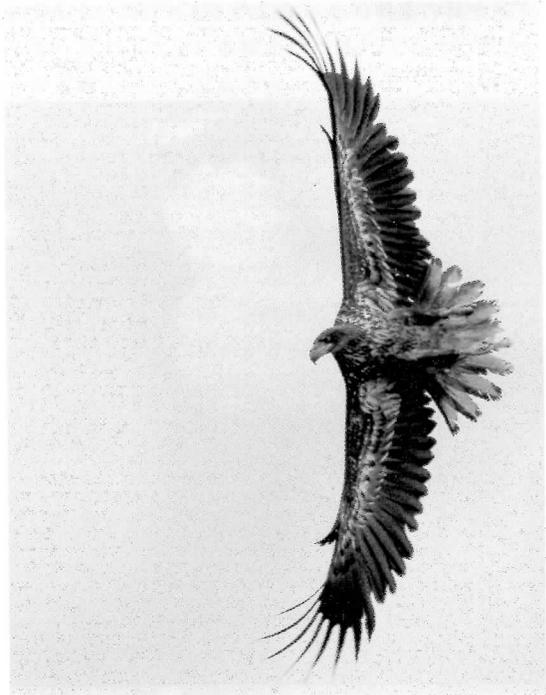
観察していて、天気の良い日に海辺へ出かけると、たまにいいことがあることに気づきました。例えば、人が少ないので鳥にとっても安心なのか、警戒心を解いてくれて、向こう側からわざわざ近づいてくれることがあります。さらに、避難していたり迷ってきている鳥がいることがあり

ます。今年の5月18日には亜種シベリアツメナガセキレイを確認しました。その時は大雨と強風の悪天候でしたが、石狩市の八幡干潟を何か来ていないだろうかと思いながら車で走っていました。13時20分頃に干潟の近くに車をとめてもらおうと、ちょうど、「ジュビッ」という鳴き声とともに3羽のツメナガセキレイの群れが近くに舞い降りしました。全個体を見ていくうちに、1羽違う個体を見つけました。

頭部が黒っぽく、白い眉斑があったので、亜種マミジロツメナガセキレイかと思いました。いい具合の場所で休憩しようとして、降りたのでしょうか。13時20分から21分の1分間ほど、じっとしてから3羽とも飛んでいきました。そのあと探しましたが、亜種ツメナガセキレイが、一瞬飛んだのを見ただけでした。その段階では正確に亜種を識別できなかったため、家に帰ってすぐに調べました。亜種シベリアツメナガセキレイの可能性が高いと思ったときは本当に感動でした。確認がとりたくて愛護会の樋口孝城さんにお尋ねしたところ北海道大学の先崎理之さんを紹介されて識別をお願いしました。結果は、亜種シベリアツメナガセキレイ(おそらく第一回夏羽)で良いだろうということでした。渡りの途中のたった1分という瞬間に出会えたのは、本当にラッキーだったと思います。このような予期せぬ珍鳥との出会いというのがたまにあります。周りの情報を聞いて、その場所に駆けつけるのもいいですが、自分で



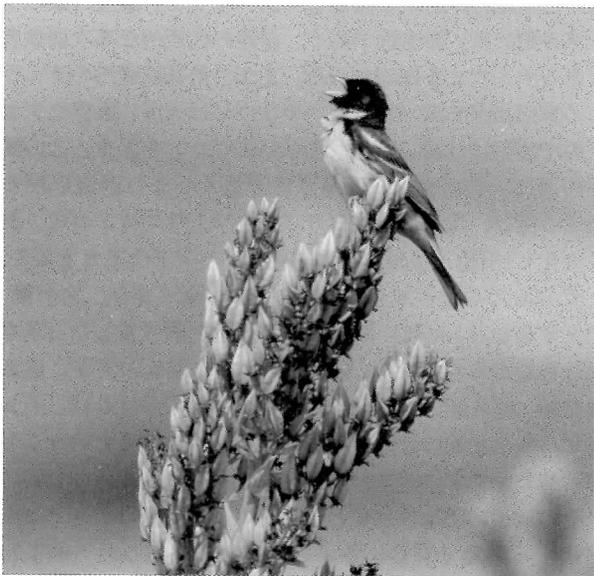
亜種シベリアツメナガセキレイ 2014. 5. 18 石狩市



オジロワシ 2014. 5. 18 石狩市

見つけることが出来るととても達成感があります。

また、同日に石狩湾新港東埠頭でオジロワシ幼鳥を観察しました。近くにいたカモメが一斉に飛び立ったので、猛禽か!と思い、周りを見回すと、案の定オジロワシが上空を飛んでいました。この日は、オオセグロカモメを襲うシーンを見ることができました。近距離だったので、とても迫力がありました。カモメは海へ飛び込み、ワシは何度か捕まえようとしたのですが、結局カラスにモビングされて去ってしまいました。このような感じで、野生生物としての自然の姿も見ることができました。雨の日は、海辺で観察をしてみるのも、ひとつの「手」ではないでしょうか。



シマアオジ 2013. 7. 13 豊富町

野鳥観察には、季節ごとの楽しみというものがあります。6月から7月中旬は、シマアオジ。自分自身、元々サロベツ原野の近くに住んでいて、転校する前まで、何回か訪れていました。そのときは、野鳥観察にまだ興味を持っていなかったもので、シマアオジが絶滅に瀕していることも、まったく知らなかったです。親に尋ねると、10年ほど前には、通過途中に庭に普通に来ていたそうです。サロベツ湿原センター周辺の湿地では一昨年はおそらく5羽ほど、去年は4羽ほど、今年も4羽ほどが飛来していたようです。このままいくと、大人になる前に原野に姿を見せなくなってしまうかもしれません。そう思って、毎年通っています。楽しみはさえずりを聞くことです。「フィーヒョーヒョーチヨチヨ」というさえずりは、透き通る声で、朝を一層爽やかなものにしてくれます。また鳴き声を聞いて、スコップで遠くにさえずる姿を見つけ出すのも面白いです。近くに来てくれた時は、待っていた達成感があります。

5月から9月末は、アオバトの海水を飲むシーン。朝の6時頃から10時頃、夕方15時頃から17時頃が見ごろです。朝日や夕日が当たると、体の緑、目・クチバシの青、オスは翼の赤がとても輝いて見えます。何十羽もの群れが頭上を飛び、舞い降りるところも感動的です。

9月から11月初旬は、室蘭のタカの渡り。撮影が難しく、



アオバト 2014. 6. 28 遠別町

なかなかうまく撮れませんが、その中でいいものが撮れると嬉しいです。一緒に観察されている方々が撮られている画像が、自分にとっては刺激的で、もっとうまく撮りたいという思いが募ります。また、シーズンが限られているので、また来年頑張ろうという気持ちになります。

春秋の渡り(4月から5月中旬、9月中旬から10月中旬)では、宮島沼が楽しいです。季節や日によって夕焼けや月などの風景が違い、次に行く時の楽しみがあります。沼では毎年、カリガネやシジュウカラガン、標識のついたマガンが何羽か飛来しています。春はハクチョウの群れに亜種アメリカコハクチョウが混ざっているかもしれません。多数のマガンやハクチョウの中から見つけ出すのは、大変ですが見つけた時は嬉しいです。



ハイタカ 2013. 10. 27 室蘭市

野鳥観察に没頭するのもいいですが、まだ中学生なので、勉強との両立も大切です。しかも来年は受験生です。ここまで頻繁に出かけられるのも、今のうちだと思っています。よく、色々な方に、アドバイスを頂いて、参考にしています。平日はたくさん勉強し野鳥観察はそのリフレッシュ、というスタイルにして頑張ろうと思っています。

フィールドでは愛護会や野鳥の会の方々をはじめ、様々な人のお世話になっています。観察のマナーや識別もフィールドでたくさん教えていただきました。またフィールドで、特にシギの観察の時には野鳥愛護会の方々にはいろいろなことを教えていただいています。この場をお借りしてお礼を申し上げます。鳥を好きになるきっかけを作ってくれた母、あちこちに連れて行ってくれる両親にも感謝しています。

シルバ通信④

ワシタカ類保全至上主義の是非

—ワシタカ類の保全は他の生物の保全に役立つか?—

北海道大学農学院 森林生態系管理学講座 先崎理之

ワシタカ類と言えば、皆さんはどのようなイメージを抱くでしょうか?かっこいい、たくましい、孤高といった魅力的なイメージを持つ方が多いのではないのでしょうか?ワシタカ類は、鳥類の中でも特に人気がある種類と言っても良いでしょう。ご存じのように、北海道には様々な環境にたくさんの種類のワシタカ類が生息しています。深山ではクマタカ、ハチクマ、ノスリ、ツミが、平地ではオオタカ、ハイタカ、チョウゲンボウが、湿地ではチュウヒが、海岸ではオジロワシ、ミサゴ、ハヤブサが、都市ではチゴハヤブサが繁殖しています。冬になると、オオワシ、ハイイロチュウヒ、ケアシノスリ、コチョウゲンボウ、シロハヤブサがやってきます。渡り期にはカタシロワシ、クロハゲワシ、マダラチュウヒ、アカアシチョウゲンボウの記録も有ります。皆さんの中にも、四季を通して様々なワシタカ類の観察を楽しんでいらっしゃる方がたくさんいるはずです。

さて、そんなワシタカ類ですが、生態系の頂点に君臨し、環境汚染に弱いこと、希少性が高いことから、豊かな生態系、豊かな生物多様性の象徴として積極的に保全されてきました。ワシタカ類の生息地を守れば、そのワシタカ類と同じ生息環境に棲む多くの生物も一緒に守れるだろうという訳です。この理論に基づけば、例えば、クマタカの生息地の保全は森林性の鳥類、哺乳類、草本類といった多くの生物の保全にも繋がるのが期待できるでしょう。実際、日本でも公共事業の際にはワシタカ類に重きを置いた環境調査が行われていますが、その背景には、ワシタカ類自体の希少性に加えて、こういった前提があることは否めません。ところが、驚くべきことに、国内で実際にこの前提が正しいかどうかを調べた例はこれまでほとんどありませんでした。

そこで私は、ワシタカ類の生息地の保全が他の生物の保全に役立つのかということ、勇払原野を中心とする胆振～日高地方に広がる湿地帯で調べました。調査対象のワシタカ類には、希少性が高く、湿地の代表的な高次捕食者であるチュウヒを選びました。まず、勇払原野内のチュウヒの繁殖状況を調べました。チュウヒは人圧に敏感なタカなので観察には細心の注意を払いました。そして、この調査の後に、チュウヒが繁殖する湿地としない湿地を16か所ずつ選び、湿地性鳥類(コヨシキリ、サンカノゴイ、クイナなど13種)、湿地性小型哺乳類(ハントウアカネズミ、ミカドネズミなど6種)、湿地性草本類(ヨシ、スゲ類、イグサ類など186種)の種数と個体数を調べました(草本類は種数のみ)。もし、チュウヒのいる湿地の方が、湿地性鳥類、哺乳類、草本類の種数と個体数が多ければ、チュウヒの保全が他の湿地性生物の保全につながるということが示せそうです。

その結果、湿地性鳥類の種数および個体数はチュウヒの繁殖する湿地で有意に多いことがわかりました(図1)。具体的には、チュウヒのいる湿地では、サンカノゴイ(写真1)、ヒメクイナ、クイナといった希少な湿地性鳥類が生息していることが多く、コヨシキリ、シマセンニュウ(写真2)、オオジュリンといった普通種の個体数も多いことがわかりました。このことは、チュウヒの生息地を守れば、他の湿地性鳥類の生息地も一緒に守ることが出来ることを示しています。一方、湿地性小型哺乳類と湿地性草本の種数と個体数は、チュウヒのいる湿地としない湿地で有意な差があるとは言えないことがわかりました(図1)。特に、草本の希少種の中には、チュウヒのいない湿地だけに生息している種類も有りました。これらのことは、湿地性の小

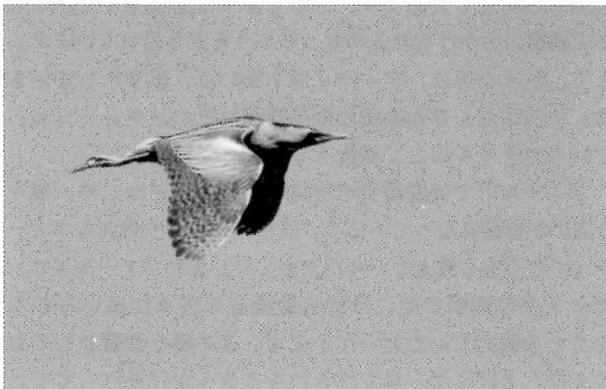


写真1. サンカノゴイ チュウヒの生息地で見られる希少種のひとつ



写真2. 子育て中のシマセンニュウ スゲやヨシの湿地の優占種

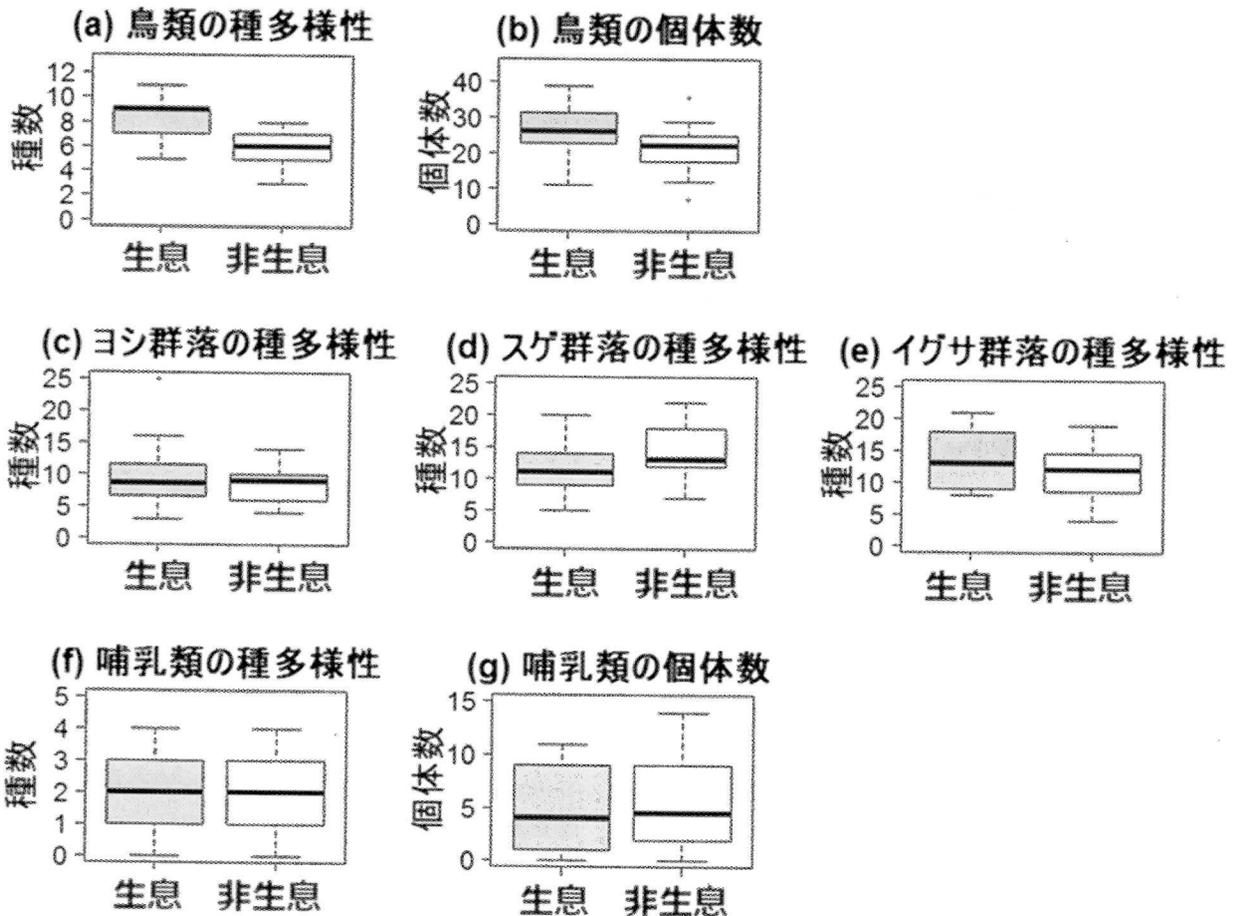


図1. チュウヒの生息/非生息と湿地性鳥類、草本類、小型哺乳類の種数・個体数の関係。
草本については、3つの群落を対象に、種数のみを調べた。

型哺乳類や草本の保全には、チュウヒの生息地の保全だけでは不十分であることを示すでしょう。

ところで、なぜチュウヒの生息地では湿地性鳥類の種数と個体数が多く、哺乳類と草本のそれらは多くなかったのでしょうか？その理由としては、チュウヒとそれぞれの分類群の天敵の共通性や生息地に求める条件が鍵を握っているように思われます。まず、チュウヒとその他の湿地性鳥類では、共通の天敵（キツネなど）を持ちます。また、チュウヒとその他の湿地性鳥類では、湿地の内部構造の複雑さ、地下水位、餌の量、湿地面積といった生息地に求める条件のうちいくつかは似ている可能性があります。チュウヒとその他の湿地性鳥類は、天敵の襲来を受けにくく、かつ生息に必要な資源が十分にある湿地を好んでいたために、このような結果になったのかもしれません。一方、チュウヒと小型哺乳類、草本類では、生息地に求める条件は幾分違って来るように思われます。小型哺乳類や草本類の種数・個体数が、チュウヒの生息と関係がなかったのはこのためかもしれません。

実は、本研究結果と同じように、ワシタカ類が様々な生き物が棲める優れた環境に生息するわけではないというこ

とは、世界的な常識になりつつあります。中には、ワシタカ類の生息と、同じ環境を好む鳥類の種数や個体数が無関係であったとする論文すら存在します。一方、ワシタカ類をはじめとした大型で希少な高次捕食者は、人気が高く、世間の環境や生物の保全への関心を高めたり、保全への投資を促進するといった優れた性質があることが知られています。生物多様性の保全を進める側は、なんでも「ワシタカ類を保全すれば良い」という姿勢ではなくて、ワシタカ類保全のこうした利点・欠点を認識しながら、他の生物の保全も最大限進むように、場合に応じてワシタカ類を生物多様性保全に利用していくのが良いのかもしれませんが、そうすれば、ワシタカ類の生息と生物多様性の関係が薄い場面や状況でも、そのアピール力により、ワシタカ類の保全が多くの生物の保全の促進に役立つかもしれません。多くの生物が減少し、絶滅の危機にさらされている昨今、国内のワシタカ類保全至上主義の場においても、ワシタカ類の保全を如何にして全体的な生物多様性保全につなげるのか、といった議論をもっと進めていく必要があるのではないのでしょうか。



朝日とエゾリス



道路を渡るカワアイサ



クルミを運ぶエゾリス

音更の森に生きるエゾリスとカワアイサたちの物語

JPS(日本写真家協会)会員 自然写真家 矢部 志朗

十勝平野は日高山脈、東大雪の山々に囲まれた広大な地域で、国内でも有数の穀倉地帯です。

明治16年(1883年)に依田勉三らが率いる晩成社の移民団が十勝に入植、ヒグマやエゾシカが走り回る、うっそうとした原始の森を切り開いたと言われています。

開発が進んだ現在でも、そんな開拓時代を彷彿させる小さな森が市街地の中に取り残されています。まるで荒涼とした砂漠に点在する「オアシス」のように、多くの野鳥や小動物に格好の生息環境を提供しています。私がエゾリスや野鳥の観察を続ける「音更神社」がまさにそのオアシス的な森といえます。自宅から2kmほど、わずか200m四方の小さな森です。

この森は大変植生の豊かな森で、多くの樹木が混生しています。特に、ミズナラ、カシワ、オニグルミ、チョウセンゴヨウなど、境内には数百年は経たと思われる巨木が数多く残り屈強な根を張り大地を掴みこんでいます。

木々が芽吹く頃エゾリスたちの子育ての季節が始まります。ミズナラの葉が巣立ちを終えた子リスたちには絶好の離乳食となります。大きくなるにつれて硬いクルミや松の実を食べますが、時には、トンボやセミなどの動物性の食べ物を、バランスよく体に取り入れている健康志向でもあります。

エゾリスの巣の多くは樹齢数百年は経たと思われる樹洞が使われますが、しかし、境内の森では多くの鳥類たちも樹洞を利用するため、例年のように繁殖時期には熾烈な巣

の争奪戦が始まります。

特に、境内に3組程営巣するカワアイサにとっては、自らの遺伝子を残すための貴重な子育ての場となるため、事前の偵察から繁殖に適した樹洞の確保まで、多くの障害を乗り越えなければなりません。

カワアイサは水鳥の仲間でもマガモほどの大きさがあり、まだまだ生態のわからない水鳥とも言われています。特に、この水鳥はオシドリと同じように、樹洞の中に産卵し子育てします。そのため大きな樹洞が必要となるわけです。境内にはそのような樹洞が十数個あり、エゾリスからカワアイサ、エゾモモンガ、ハリオアマツバメなどが交互に使用しており、その競争率は高くそれぞれが懸命に、境内の森でつばぜり合いをしているわけです。

また、カワアイサは多くの卵を産み育てることで知られていますが、境内の森では最大で15羽もの雛を育てた事例もあります、本当に多産系の水鳥と言えるのです。カワアイサの雛の巣立ちは高さ8m近い樹洞から行われます、飛べない羽をばたつかせて、ボトボトと連続して地上に落ちてくるからその様子はまさに壮観なのです。

下で待ち受ける母鳥は周囲を警戒しながら、雛たちを境内近くの音更町役場の池まで整列して導く、まさに母は強しと実感させられる光景と言えます。

そして、数日後には1.5kmほど離れた音更川本流まで移動させるのですが、これがまた大変な作業で上手いかなければ自らの遺伝子を残すことが出来ない大変重要な行事



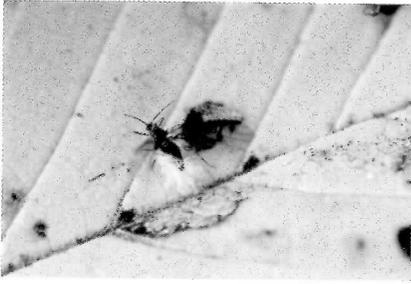
池に入るカワアイサ



松かさの鱗片を剥ぐエゾリス



エゾヤチネズミ



雪虫



イチイの実に集まるアリ



エゾモモンガ

と言えます。

国道や、町道を何本か横断しなければならず、時には警察官の支援を頂きながらの進行となることもあります。音更川本流では、例年だと十数羽のうち残るのは数羽となりますが、これも野生で生きる厳しい現実と言えるでしょう。

エゾリスが始めに使用した樹洞は、翌年カワアイサやハリオアマツバメなどが営巣することがあります、これも、私個人的にはそれぞれの動物の生態的な特徴が、巧みな共生関係で結ばれているのではないかと推測しています。

なぜかと言うと、大きな樹洞の木はそのほとんどが空洞になっていますから、巣として使用するには一定の深さの位置に落下しない巣材がなければならぬと考えられるからです。

ですから、巣材運びをしっかりと行うエゾリスが最初にその樹洞を使い、翌年しっかりと土台の出来たエゾリスの巣をカワアイサが使うと考えられます。カワアイサを20年以上観察していますが、まだ一度も巣材を運ぶ母鳥を見かけたことがないのもうなずけます。

秋も深まり、巣立ったカワアイサたちも渡りの季節を迎えていることと思います。境内に多いイチイの赤い実に南下途中のメジロの小さな群れが立ち寄り、カケスが境内のミズナラの巨木の下で大好物のドングリを食べています。朽ちた木の下ではエゾヤチネズミが野草の茎をかじり、ひょうきんな表情で私を見つめています。そろそろエゾフクロウたちもやって来るでしょう。

これから迎える季節の厳しさは、野鳥たちもエゾリスたちもしっかり認識しています。特に、冬眠しないエゾリスたちはクルミやチョウセンゴヨウの実を毎日収穫して冬に備えるのです。

それが、「貯食」と言う彼らにとって欠かせない行動なのです。特にチョウセンゴヨウには直径1cm前後の種子が、約90粒ほど松かさの中にギッシリと詰まっています。そ

の実をエゾリスは全てその場で食べるわけではありません。多くをしっかりと土の中や、木の股などに貯食して長く厳しい冬を生き抜くのです。それが営々と続く知恵で、彼らの体の中に遺伝子として確実に残されているのです。

もちろん、土の中に忘れられた木の実は、春になり小さな森の一員としてデビューすることでしょう。森の木々が葉を落とし、境内の林床に晩秋の光が差し込む頃、まるで、真綿のような衣装を纏った「雪虫」が舞い始め冬が近いことを知らせてくれます。

ここで少し、私の写真集のお知らせになりますが今秋9月19日に北海道新聞社より、「小さな森の物語 十勝・鎮守の杜の動物たち」が出版され、現在道内の書店で販売されています。

この写真集はまさに、音更神社境内に30年以上通い続けた、集大成ともいえる私の2冊目の写真集です。そんな小さな物語を書店で手にとって頂ければ幸いです。

音更神社の森は、大自然が凝縮された空間です。

しかも、人と野生が隣り合って
生きているという貴重な世界です。

この共存を
未来永劫守っていきたくと
願わずにはられません。

～小さな森の物語 十勝・鎮守の杜の動物たちエピソードより～

プロフィール 音更町生まれ。北海道農政事務所を退職後、小動物と森の共存をテーマに自然写真を撮り続ける。2005年から2011年まで、北海道新聞十勝版に「小さな森の物語」「トカブチ森紀行」を連載。矢部写真事務所主宰。



エゾフクロウとエゾリス



樹上のカワアイサ



イチイの実を食べるメジロ

石狩市にマナヅル

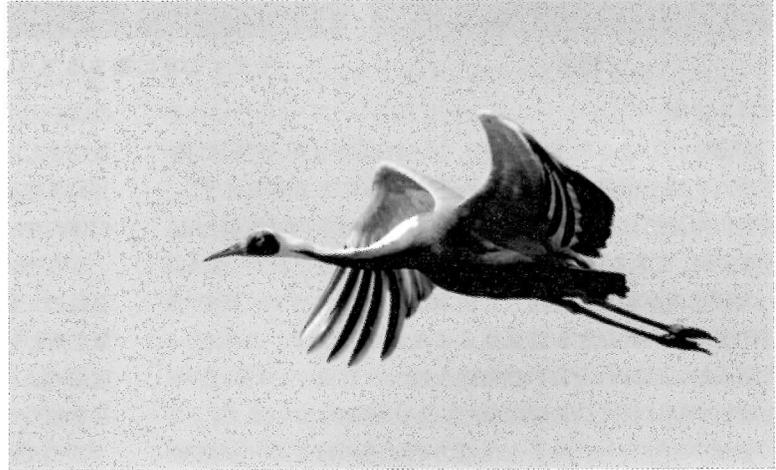
当別町 道川 富美子

今秋、石狩市にマナヅル1羽が飛来しました。成鳥と思われます。少なくとも2014年9月24日から10月1日までの8日間、いしかり調整池と周辺の畑地や水路を行き来し、採餌したり休息したりしている姿が観察されました。その頃、いしかり調整池にはアオサギ・ダイサギなどのサギ類が10～30羽程度飛来していて、ハマシギ・トウネンなどのシギ・チドリ類も少数見られていました。いしかり調整池は石狩市北生振にある農業用貯水池で、昨秋から本会の探鳥会が開催されている場所です(*1)。

マナヅルはシベリア南東部・モンゴル北東部・中国東北部の湿原で繁殖し、中国江西省ポーヤン湖や長江下流域・朝鮮半島・九州に渡って越冬します(*2)。

日本への飛来は鹿児島県出水市周辺にほぼ限られ、越冬期間は10月中旬から3月中旬で、今回も通常の飛行ルートから外れてやってきたものでしょう。過去には、石狩管内では2001年3月長都沼周辺(*3)、2006年9、10月石狩川八幡干潟(*4)への飛来が記録されています。

今頃は、無事仲間と合流していることでしょう。



マナヅル 2014.9.25 いしかり調整池

- *1 本会ホームページ. 探鳥地紹介
(<http://www.aigokai.org/06guide/kitaoyafuru.htm>)
- *2 青い星のツルたちー世界のツル・日本のツルー.
北海道保健環境部自然保護課. 1990年
- *3 佐藤幸典. マナヅル観察記録.
北海道野鳥だより第124号. 2001年
- *4 石狩鳥類研究会. 石狩管内野鳥年次記録
(<http://www12.plala.or.jp/ishikarichoken/13nenji.pdf>)



アカアシチョウゲンボウ雌第一回夏羽
(カラー写真は<http://www.aigokai.org>)に掲載

表紙の写真

6月のサロベツ原野オロロンライン側、豊富町稚咲内の牧場道路を走っていた時のことです。電線にチョウゲンボウがとまっているのを見かけ同行していた知人と撮影したのですが、何だかチョウゲンボウともコチョウゲンボウとも模様が違う……。

手持ちの野鳥図鑑にもそれらしい鳥が載っていないため、スマホで調べたところアカアシチョウゲンボウだということがわかりました。何冊もの図鑑を首っ引きで調べずにすみ、しかも観察しているその場で珍鳥がわかるのですから、いやはや技術の発展とはありがたいものです。

石田 卓也(札幌市西区)



石狩川河口

2014. 8. 24

札幌市中央区 山室ゆかり

豊平公園に置いてあった「ウォッチングガイド」でこの会を知り、野鳥の観察をしてみたいと考えていましたが、一人での参加に不安があり、踏み切れずにいました。しかし、今回の活動は海鳥の観察。公園や山にいる野鳥しか見たことがない私にとっては、またとないチャンスです。「どうしても見てみたい！」という強い気持ちが内気な私を後押ししました。

当日はよい天気。胸はワクワクしているものの不安も強く、おどおどしていた私に優しい声を掛けて下さった愛護会の方々に感謝申し上げます。

海岸沿いに歩き出してもなく、「あっ、あそこにいる！」との声。慌てて双眼鏡を海に向けると、皆さんは浜辺を観察中。「そういう場所を探すの？」と驚いたり感心したり。それでもなかなか見つけれられません。「波打ち際の所ですよ」と教えていただき、ようやく発見できました。「海鳥は海で発見」と思いこんでいたので、目からウロコでした。メダイチドリやトウネンの可愛らしさ、カンムリカイツブリの美しさ、そしてソリハシシギやイソシギの足の細さや長さ感激し通しでした。ミサゴが私達の頭上を大きな魚を驚げかみにし、飛び去る姿にも圧倒されました。他にもたくさんの鳥を観察できたことに大きな喜びを感じています。

愛護会の皆様には名前を覚えて頂いたり、スコープで見せて頂いたりと何から何までお世話になりました。これからは海や河口にも出掛けたり、探鳥会にも積極的に参加したりしていきたいと思えます。

【記録された鳥】カルガモ、カンムリカイツブリ、カワウ、ウミウ、アオサギ、メダイチドリ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、ハシブトガラス、ヒバリ、ノビタキ、カワラヒワ、ホオアカ 以上20種

【参加者】足助瑠美子、荒木良一、今村三枝子、岩井 茂、白田 正、内山英晋、大表順子、北山政人、栗林宏三、小堀煌治、坂井伍一、潮見 諭、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、瀬川 睦、高橋きよ子、徳田恵美、戸津高保、中正憲佑、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、丸島道子、山室ゆかり、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ

以上34名

【担当幹事】栗林宏三、原 美保

鵠川河口

2014. 8. 31

白老町 鹿野内 裕子

風もなく、穏やかによく晴れた鵠川。絶好の探鳥会日和となりました。初心者の方は普段、単独か2～3人で鳥見に行っているのですが、今回のように大勢というのは初めてでした。

鵠川右岸の河口へ続く草原の中の道を歩きます。私から見ると「ただ草原が広がる風景」なだけなのに、皆さんは次々と野鳥を見つけ、あちこちから鳥の名前が聞こえてきます。ベテランの方々の視野の広いことには本当に驚かされました。私もスコープを覗かせていただきました。そして野鳥の識別の仕方、例えば飛び方・歩き方・餌の食べ方・飛ぶ時の鳴き声などを教えていただきました。又、野鳥の繁殖についてのお話を聞き、遠くから見守ることの大切さを痛感しました。干潟にはアオアシシギ、オグロシギ、タカブシギ、ハマシギなどがいました。これらは私は初めて見たので、特に印象深かったです。アオアシシギの、嘴を泥の中に入れてそのまま走る餌の取り方が、なんともユーモラスでした。鳥合わせをしたら、なんと30種類も！私一人だったら、半分も見つけていなかったでしょう。今回初めての参加でしたが、会の皆さんがとても親身に接して下さり、嬉しかったです。初めてお会いした方々ですが、「野鳥」という共通点のおかげか、以前から知っていたような、そんな気持ちになりました。

私は地元の保育園で保育士として働いています。子ども達の多くは、野鳥といえばスズメとカラスしか知りません。遠足で動物園に行った時も、オオワシ、タンチョウ、フクロウを見てもよくわからない様子でした。折を見て、野鳥について話をしてみようと思っています。いつも園の周りにはスズメやカササギ、冬になればツグミ、もうすぐV字隊列で渡ってゆく姿が見えるハクチョウなど、身近に見られる野鳥に少しずつでも興味を持ってくれたら…と思います。

【記録された鳥】コハクチョウ、マガモ、カルガモ、キジバト、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、メダイチドリ、オグロシギ、アオアシシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、ハマシギ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、チュウビ、オオタカ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、コヨシキリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ 以上30種

【参加者】大表順子、小山内恵子、片見尚宏・怜子、門村徳男、鹿野内和弘・なおみ・裕子、川東保憲・知子、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、品川睦生、島田芳郎、清水朋子、鈴木恵子、竹内 正、竹内 強、中正憲佑・弘子、中田勝義、野村 巖、蓮井 肇、畑 正輔、

林 三浩、林 茂雄、原 美保、松原寛直・敏子、三井 茂、宮森俊治・美保子・泰、村田睦子、山下政俊・弘美、山室ゆかり、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸 以上42名
【担当幹事】 門村徳男、島田芳郎

野幌森林公園

2014. 9. 7

【記録された鳥】 オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、トビ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ゴジュウカラ、コサメビタキ、イカル、アオジ 以上21種

【参加者】 秋山洋子、井上公雄、今村三枝子、後藤義民、小西美美枝、坂井伍一、清水朋子、鈴木恵子、高橋貞夫・芳子、竹田芳範、辻 雅司、戸津高保、長野隆行、中村 隆、畑 正輔、樋口孝城、広木朋子、三輪礼二郎、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上22名

【担当幹事】 辻 雅司、横山加奈子

いしかり調整池

2014. 9. 14

江別市 高橋 貞夫

定年を機に、野幌森林公園が自宅から近いこともあり、散歩がてらに植物の観察や野鳥観察を初めて2年半あまりになります。ようやく、山野にいる鳥の名前を少しずつ覚えて来たところです。

天候も朝から晴れ、絶好の探鳥会日和。「いしかり調整池」探鳥会は、今回初めて参加の場所であり、どんな鳥にあえるのか楽しみに夫婦で参加しました。自宅から車で出発、野鳥愛護会の地図を確認しながら集合時間の30分前に無事目的地へ到着。

すでに大勢の参加者が来ていたのには少し驚きながらも、調整池の中を覗きみるとアオサギとダイサギ数羽の姿を確認。アオサギは野幌森林公園の大沢池や河川でよく見かけるのですが、ダイサギを真近に見ることが無かったので感激。調整池に佇むアオサギ、ダイサギが晴天の空を背景に水辺に写る姿は、心を和ます風景でした。

いしかり調整池は、塩分濃度に左右されない安定したかんがい用水を確保するための貯留施設として、平成13年度に施設され現在に至っているとの説明（調整池の形状は、短辺長334.2m、長辺長454.2m、全周長1,576.8m、壁高H=4.2m）。春と秋に、渡り鳥がここに飛来するようになったとの事。

9時30分、集合の合図で探鳥会がスタート。周囲約1.5kmの調整池を約1時間半から2時間かけて右側から回り、野鳥観察。開始早々、トウネンが数羽右側手前に

いるとの情報があり、双眼鏡で見ると中々その姿を見つけられず近くまで移動、ようやく干潟の中をちよろちよろ歩き回るトウネン3羽を発見。想像したよりも小さく、とてもかわいい。そうこうしている内に、西の空にコガモの群れが大旋回を始め一同暫し注目。近くに水場があり、そこから飛立っらしい。

調整池の中ほどで、アオサギ・ダイサギ（中にチュウサギもいたらしい）数羽が静止したり、餌を探したりしている姿を肉眼で見ることができました。対壁にいるシギ類は、双眼鏡では中々見つけられなかったのですが、愛護会の方のスコップでコアオアシギやタカブシギ、ヒバリシギを見せていただきました。カワセミは、残念ながら発見できず！

水辺の鳥を見る機会が余りない中、今回の探鳥会で種類のシギの名前と姿を確認し、覚える事ができました。シギ類の数は少なかったですが、愛護会の皆さんに色々教えていただき、楽しい時間を過ごす事に感謝です。有難うございました。



ダイサギ 2014. 9. 14 撮影 高橋貞夫

【記録された鳥】 コガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、オグロシギ、コアオアシギ、タカブシギ、トウネン、ヒバリシギ、トビ、カワセミ、ハヤブサ、モズ、ハシブトガラス、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上19種

【参加者】 青山和正、阿部真美、荒木良一、五十嵐加代子、井上公雄、今村三枝子、上村淳子・優貴乃、大坪和憲・ミヤ子、小島俊幸・惇子、鹿野内裕子、栗林宏三、小林 誠、坂井伍一、佐賀俊三・テエ子、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋きよ子、高橋貞夫・芳子、竹内 強・麟太郎、武田規子、立田節子、田中 陽・雅子、辻 雅司、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、中村 隆、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、本間康裕、松尾幸雄、松原寛直・敏子、村田睦子、山室ゆかり、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子 以上52名

【担当幹事】 中正憲信、樋口孝城

宮 島 沼

2014. 10. 5

幕別町 城石 一徹

10月5日に宮島沼にて行われた探鳥会に参加させて頂きました。北海道で生まれてこの方23年になりますが、宮島沼を訪れたことが無い上、私事ではありますが、次年度から北海道を離れる事となり、一度はマガンの壮大な峙立ちを目に焼き付けようと今回の探鳥会参加を希望いたしました。

言われていた通り、マガンの飛来数は例年より少ないと仰る方もいましたが、私にとっては圧巻の規模で非常に満足でした。私の住む道東方面にもマガンは飛来しますが、常にヒシクイの数が上回り、規模も比較的小さい為、同じ種でも新鮮さを感じると共に、道内でも西と東の環境の差異を五感で感じられる探鳥会となりました。

最後になりますが、探鳥会を主催されました北海道野鳥愛護会の皆様、そして多くの参加者の皆様との出会いに感謝致します。今後とも皆様の御活躍と素晴らしい野鳥との出会いを祈念しております。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、カリガネ、シジュウカラガン、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、チュウヒ、モズ、ハシブトガラス、カワラヒワ、カシラダカ、アオジ
以上22種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、白田 正、内山純一・雅子、栗林宏三、坂井伍一、品川陸生、島田芳郎・陽子、城石一徹、高橋良直、竹内 強、田中 陽・雅子、戸津高保、中正憲佑、中田勝義、野村 巖、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、原 美保、堀尾尚司、本間康裕、山本真理子、吉田慶子
以上27名

【担当幹事】坂井伍一、畑 正輔

野 幌 森 林 公 園

2014. 10. 12

札幌市清田区 後藤 義民

この日の朝は気温が10℃を下回る寒い朝でしたが、雲一つない青空が広がってました。集合場所には沢山の人が集まってました。常連さん、家族連れ、友人同士等々40名の参加者です。

ところが歩き出して暫くは声も姿もさっぱりです。何やら、夏鳥は南に帰ってしまい、冬鳥はまだ渡って来ないとか!?それでも少しずつ留鳥たちの姿が見れる様になりました。前を歩いていた人達が、黒い実の付いた草を見つけたみたいです。実の色が、野鳥のツバメの背中同様の黒色と同じだから「ツバメオモト」というんだヨ、と

常連の女性が教えてくれました。植物には、鳥の名前のついた種類があるみたいですネ。

大沢の池です。「スズガモ」「キンクロハジロ」のカモ類、他にも「カイツブリ」等いましたが、同行の人の望遠鏡を見せてもらいやっと確認できました。

昼食後大沢園地から間もなくの所で「クマゲラ」の声、姿も。後部を歩いていた人達はラッキー!!

今回は、観察例は少ないものの、それでも28種に出会うことができました。晴天に恵まれたとても良い探鳥会でした。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、キジバト、トビ、ノスリ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、カケス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、イカル、アオジ

以上28種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、荒木良一、井上公雄、今村三枝子、大朝暁子、大坂博記、太田敏枝、太田道子、笠井好美、加藤茜湖、川村宣子、後藤義民、小西美美枝、齋藤由美子・佑朱、坂井伍一、品川陸生、清水朋子、杉田範男、瀬川 陸、高橋貞夫・芳子、田中 陽・雅子、戸津高保、中垣美代子、中正憲佑・弘子、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、道川富美子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上40名

【担当幹事】後藤義民、道川富美子

野 幌 森 林 公 園

2014. 11. 2

【記録された鳥】ヒドリガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ヤブサメ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ミソサザイ、シロハラ、ツグミ、ルリビタキ、カワラヒワ

以上26種

【参加者】阿部真美、鹿川美咲、桑田義英、小西美美枝、坂井伍一、品川陸生、清水朋子、高橋貞夫、田中 陽・雅子、辻田捷紀・恵美子、道場 優、富川 徹、中正憲佑、南條沙也香、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子
以上24名

【担当幹事】道場 優、富川 徹



【小樽港】 2015年1月18日(日)
札幌から貸し切りバスを利用して行きます。日和山灯台付近、祝津漁港、高島漁港、フェリーターミナルなどを周回、海ガモ類、カモメ類、ウミガラス類などを観察します。以下の要領で実施しますので、参加希望者はお申し込みください。

集合場所：札幌駅北口(中央)「鐘の広場」

集合時刻：8:00

帰着時刻：16:00頃

定員：45名

参加費：2,000円

申込先：畑 幹事

1月6日(火)から9日(金)までの毎日9:00~20:00。

電話・E-mailにて受け付けます。

(E-mailの場合、電話番号を明記願います。)

なお定員になり次第締め切ります。

電話 011-894-0017

E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食をとります。
- ・往復とも途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】 2015年2月1日(日)

冬の野幌森林公園を雪を踏みしめながら、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。12時頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。昼食はふれあい交流館でとることができます。

集合：野幌森林公園大沢口 9:00

交通：夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)

大沢公園入口下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

【円山公園】 2015年3月1日(日)

春の訪れを迎えた円山公園内をキツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。

午前中で解散の予定です。(昼食不要)

集合：円山公園管理事務所前 9:00

交通：地下鉄東西線 「円山公園」下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】 2015年3月22日(日)

南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期北の繁殖地に渡り始めます。渡り鳥の中継地であるウトナイ湖で多くのカモ類、オジロワシ、オオワシなどを観察します。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとる

ことができます。

集合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時~午後4時(土日、祝祭日を除く。)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 2015年1月10日(土) 13:30~16:00

・場所 かでる2・7 520研修室

札幌市中央区北2条西7丁目

※前年と会場が変わっています。ご注意ください。

・講師 長谷川 理氏 (エコ・ネットワーク)

・演題 大型カモメの種分化とオオセグロカモメの都市生活

・講演内容：大型カモメの種・亜種の分類は、近年ますます細分化される傾向にあります。しかしDNA分析やいくつかの形態解析は、必ずしも細分化を保証する結果にはならず、その解釈はなかなかやっかいです。大型カモメの識別に情熱を傾ける人もいれば、あきらめモードの人もいるでしょうが、その複雑でダイナミックな種分化の過程をいっしょに考えてみましょう。また、札幌ではオオセグロカモメが都市部で繁殖しています。彼らは大都市で何を食べ、どのような場所に暮らしているのか。少しずつ明らかになってきたシテイライフの様子を紹介いたします。

・野鳥写真映写 (講演終了後。15:00頃から)

会員の皆様が撮影された写真を映写します。映写時間を調整するため、映写を希望される方は事前に連絡をお願いします。連絡先：高橋幹事 (brb32264@nifty.com)

当日、写真をUSBメモリ等にコピーしてお越し下さい。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、酒楽(札幌市中央区北5条西6丁目、道通ビル地下1F)で行います。会費は3,500円程度です。前もっての申し込みは不要です。どうぞご参加下さい。

【新しく会員になられた方々】

鹿野内 裕子・和弘・なおみ(白老郡白老町)

喜田 克郎(苫小牧市)

大朝 暁子(江別市)

齋藤 浩一郎・由美子・佑朱(江別市)

中垣 美代子(札幌市厚別区)

青山 明彦・みどり(札幌市中央区)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会会付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>